

<3 月月次総評>

新年度になりベテランに交じり新顔もチラホラ。口語詩句もいよいよ多様で自由な雰囲気を見せてきたと思う。今月は俳句の季語をうまく使って新しい詩形にいのちを吹き込んでいる作品が目についた。窮迫した事態に対処する季語の伝統の底力はやはりすごい。

真っ暗な天井に向かい
しりとりを
子らと続ける帰省した夜

多田ぐりほ 神奈川県

——久しぶりの帰省。暗闇の中でしりとりをするのは心がほどけていく時間。

だけどまだ地球は滅亡していない
「だけど」はわりと明るい逆接

南雲ゆゆ 大分県

——まだわりと“明るい”と言い切る。それが怖れ、そして希望。

画面で動くわたしは別人のように
醜くて
それほどわたしは
わたしを愛してる

水木貴奈子 神奈川県

——リモートや動画などで自分の姿を見ることが増えた。動くかたちで自分の姿が暴きだされるのは思っていたより生々しい。しかし目を背けてはならない。でないとアバター依存に走ったりすることになる。

僕のポケットティッシュは
絶対にクシャクシャになる

早川 のり 東京都

——どんな動きをしているからそうなるのか。意志とか学習ではどうにもならないことがある。

山笑うゆっくりバット持ち替える

吉沢 美香 宮城県

——季語はやはり素晴らしい。変幻自在だ。自然のいとなみと人間の心をゆっくりと同化させてくれる。

風光る虚実も世界彷徨えば

鈴木 勝也 京都府

——これも季語の働き。ゆくえも知れない世界の現実を「あわてるな、風が光っているじゃないか」と一言で押さえる。

山暮れて最適解の花曇

奎いう子 佐賀県

——暮れ方と花曇り。この取り合わせ以上にふさわしいものがあるか。会計学や工学で使われる“最適解”という固い用語との取り合わせの妙。

その穴に隠すはなにか

五円玉

夜 東京都

——五円玉は世界でも珍しい穴あき硬貨。しかも一円や百円が木や花など単純な象徴柄であるのに、稲穂は農業、水は水産業、歯車は工業と一手に日本を担っている。その最初の材料は戦後の焼け野原で掘り出された大砲の薬莖だそうで、訳アリだねえ。

春の舟秋田犬のみのせてゆく

中矢 温 東京都

——高瀬舟ではないけれど、あまり大きくない舟におとなしく座って運ばれていく犬。秋田犬でないと成立しない日本の風景。

満員電車で陽がさすと

みんな

焼かれた埴輪のようだ

氷丸 茨城県

——表情の乏しい日本人が疲れて満員電車に乗っている。赤い夕陽に照らされて。卓抜な比喩。

春の雪パンドラの匣振り回す

花澤 希海 千葉県

——開ければ希望さえ残らないパンドラの匣を振り回す某大統領。ここはやはりはかない春の雪が似合う。

生温い春風みたいにおろおろと

筆筒の奥に転がる硬貨

まちりこ 埼玉県

——いつの頃からか筆筒にまぎれた硬貨が一つ。場所をわきまえずどうもすみませんみたいな感じで、なぜか共感してしまう。時おり場所を間違う私たちは。

コンビニで明日の朝のパンを買う

そのあとネットでミサイルを買う

まちりこ 埼玉県

——欲すればすべてが容易に手に入るような気がする現代。錯覚なのだろうか、要るものを間違えているのだろうか。

まだやわらかな犬の耳を

手のひらの中で何度も

何度も

座禅草のかたちにした

春町 美月 大阪府

——座禅草は窪めた掌の形をしていて先端が垂れたりする。「キミの耳は座禅草だよ」と作者に遊ばれているワン公は迷惑だろうが、こんなことで私たちは癒されたりする。

さらば肉 米屋の隣にいた肉たち

合川秋穂 京都府

——私たちはいつの間にか、米は米屋に肉は肉屋に並んでいるものと思込んでいる。物価の急激な高騰にあってはじめて、それらがどうやって私たちの食卓へやってくるのか、どんな命が宿っていたのか思い出す。